

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館 ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
連絡所 〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

被爆者に心を寄せながら

平和運動や核問題に関わるようになってからは、青年団の仕事をするようになってからだ。日本青年団協議会の事務局に入った当時は国連軍縮特別総会(SSD II・一九八二年)にむけて、大きな運動のうねりがあった頃だった。その中で私が一番衝撃を受けたのは、「被爆者健康手帳取得者一覧」を見て、全ての都道府県に被爆者がいると知ったことだった。それまでは、被爆者は広島と長崎にほぼ集中していると漠然と思っ込んでいたのだ。世の中は核兵器廃絶のためのかつてない大きな運動が広がっているというのに、自分は広島・長崎について何も知らないという恥ずかしさ、とても人には言えなかった。その当時に約三十七万人の被爆者がいるということも私の無知で漠然とした感覚からすればとてもショックな数だった。被爆者は特別な場所にいる特別な人ではなくて、自分のすぐそばにいる、とても近い存在なのかもしれないとき思ったのだ。

それから二〇〇一年近くが過ぎて、昨年の夏のこと。私のいとこ夫婦が数年ぶりに我が家を訪れた。あれこれ話しているうちに、この連れ合いであるS子さんが被爆者であることがわかった。S子さんの妹も、そして昨年亡くなったS子さんの母親も被爆者だった。その母親は、被爆者として地域で率先して証言活動などに参加していたという。長年親戚づきあいをしているなかでも、誰にも語らなかつたことだった。S子さんの夫である私のいとこは、定年退職後の自由な時間が増えて、近頃、家族や身近な親戚に向けてミニコミ新聞を作るようになった。亡くなったS子さんの母親を偲んで、生い立ちや長崎の原爆のことを伝えようという原稿を書いたが、S子さんは「待ってほしい」と懇願したそうだ。自分の孫が元気で生まれるのを見るまでは、子供に被爆者であることを知らせたくないの思

坂野直子

からだった。

* 被爆者は確かに私たちのすぐそば、日常の中にいるのだと思った。二〇〇一年前、全国に被爆者がいることを知ったあのときの衝撃を、あらためて受け止め、見詰め直してみたいと思った。

第五福竜丸に関連しても同じように、数年前まで知らなかったことがある。ビキニ水爆実験で被災した日本の船は、第五福竜丸だけではなく、実は八〇〇隻あまりの漁船や船舶、一人余の漁師や船員が被災しているということだ。第五福竜丸や久保山愛吉さんが被爆の象徴として語り継がれてきた反面、その他の被害については多く語られる機会がほとんどなかったといっている。もはや、当時この魚屋も寿司屋も大変な打撃を受けたことなど忘れられてしまっている。

歴史の事実を知ることの意味は大きい。しかし、知る機会がどれだけ今の社会の中で保障されているかが大切なのだ。戦後五十七年、二〇〇一年前の私のように何も知らない人は、今、もっと増えているかもしれない。それでも私たちの暮らしの中にある原爆や、あの核実験の被害は今も存在している。みんなのすぐそばに存在している。そのことに気づき、自ら触れてみるという機会を、もっと作る必要があるのだと思う。

第五福竜丸展示館には修学旅行の生徒たちがたくさん訪れる。圧倒されるような船の姿、多くの写真、様々な展示物との出会いの中で、きつとはじめて知ることの重みに、心震える思いを抱いて帰る生徒たちがたくさんいるに違いない。

(日本青年団協議会前総務部長、第五福竜丸平和協会評議員)

9・23展示館で今年も多彩な催し

第五福竜丸の無縁長久保山愛吉さんの四八回目の命日に当たる九月二三日、展示館では市民団体などによる「平和を語るつどい」、「久保山忌句会」、「東京原水協学習と見学をつどい」、「マゲロ塚をつくる会をつどい」が開かれ、大勢の方々が訪れました。



久保山碑に献花

「平和を語るつどい」は今年で一〇回目をむかえ、中村博さん(日本子どもを守る会会長)の司会ですすめられ、語り「ホテルに

なつた兵隊さん」、「よみがえつた第五福竜丸」、紙芝居「あかふんせんせい」、「おかあさんのうた」の上演をはじめ、トランペット演奏、合唱やバイオリン演奏など、平和をねがう心があふれました。平和協会から藤田秀雄副会長が歓迎のあいさつを述べました。

* 「久保山忌句会」は二二回目。午前中は久保山碑への献花、展示館周辺を吟行、午後は会場を移して句会がもたれました。

記念の講演をした文化財建造物保存技術協会の日塔和彦さんは、八五年の第五福竜丸の船体修理をスライドで説明、船体の外観を損なうことなく「船の中にもう一つの船を作るような」工事をほどこしたことを語りました。

句会では石川貞夫さんの作品「親子コーラス碑裏に透けて久保山忌」が最高点句に選ばれ、「平和協会・特別船員賞」が山村茂雄理事より贈られました。

高点句には、次の句が選ばれました。〈碑に積めば花はビキニの海の色 山本俊夫〉〈碑の薔薇は苗より非核の世紀説く 花房凡夫〉〈雨ひとつぶにも剥落エンジ



年々参加者が増える9・23の催し

ン碑の耳に 田中千恵子) 〈地球守る碑文に根付く「すずの薔薇」今関民雄) 〈曼珠沙華の蕊発信す 鮎塚 森白樹) * 「東京原水協のつどい」には、八〇名が参加、平和協会の川崎昭一郎会長の案内で展示館を見学したのち、夢の島総合体育館の会議室で学習会を開き、被爆者の田川時彦・東友会会長の講演、大石又七さんのマージナル訪問報告などがおこなわれました。

「東京原水協のつどい」には、八〇名が参加、平和協会の川崎昭一郎会長の案内で展示館を見学したのち、夢の島総合体育館の会議室で学習会を開き、被爆者の田川時彦・東友会会長の講演、大石又七さんのマージナル訪問報告などがおこなわれました。

寄贈資料の紹介

報告集「二〇〇二年ビキニ被災の全容解明をめざす研究交流集会」今年六回目をむかえる静岡での研究交流集会の記録集です。ビキニ事件が福竜丸の被ばくの問題だけに留まらず、たくさんの方の船舶や乗組員の被害とその後について、その全体像の解明を問題意識に始められた研究会。今年「今語り伝えたいビキニ被災」と題するシンポジウム、3・1ビキニデーに来日したマージナル代表ピーター・アンジャンさんの特別発言、マージナルの補償問題の現状についての研究・竹峰誠一郎(早稲田大学大学院生)さんの報告、ロンゲラップ環礁の放射能汚染状況について野口邦和と日本科学者会議事務局長の報告と各報告者が提供した資料が収録されています。

特に福竜丸被ばく直後の焼津の漁師の夫人たちの社会調査記録や静岡県大井川の原水爆反対の署名運動の報告など当時の様子を知ろうと貴重です。

編集・発行 113・1ビキニデー静岡県実行委員会、ビキニ水爆被災事件静岡県調査研究会。

合唱曲「ひかりのぼらは」愛吉・すずのぼらによせて」の作詞者として

埋田昇 一

久保山愛吉さんの四八回目を命日に当たる九月二三日に、反核・平和のシンボルとなっている「愛吉・すずのぼら」をひろめる「ひかりのぼらは」愛吉・すずのぼらによせて」(作曲・木下そんき)を作詞した私としても大変うれしいことです。

まだ、すずさんが存命中、すずさんが愛吉さんによせる思いをうたった合唱曲「海に生きたあなたよ」久保山愛吉さんに捧ぐ」(合唱組曲「青く輝く地球のために」第三章)を作詞するために、幾度か焼津市浜当日にあった愛吉さんのお宅を訪れ、すずさんからお話を聴きました。海の男、愛吉さん

しく咲いていたのを覚えていません。

その頃、すずさんは三・一ビキニデー集会には欠かさず「おことづて」を寄せられ、日々の暮らしの中では時折訪れる静岡県内の中学生や高校生、全国から修学旅行などで訪れる子供たちには、いつでも快よくビキニ事件や第五福竜丸と愛吉さんのことを語る「平和の語り部」となっていました。

一九八八年八月に高知県におけるビキニ被災船の調査活動を進めていた高知の高校生平和ゼミナールの若者たちと焼津の中学生が浜当日のすずさんのお宅を訪ねたとき、若者たちの目を引いたのが「ぼら」の花でした。高知へ帰った一人の女子高生がお礼の手紙の中で「すずさんが大切に育ててきたぼらの花を分けていただけませんか」という願いが書き記されていました。すずさんは、さっそく園芸

にくわしい知人に教えてもらい、ぼらを挿し木にしました。翌八九年三月一日、久保山愛吉さんの墓前祭に参加した高知県の代表にすずさんの手から四本の挿し木が渡され、大きな感動を呼び起こしました。この八九年三・一ビキニデー集会を機に、「愛吉・すずのぼら」が反核平和のシンボルとして東京・夢の島の第五福竜丸展示館や京都の立命館大学国際平和ミュージアムなど全国にひろがったのでした。

「愛吉・すずのぼら」が、こうして平和を愛する全国の人々の心の花としてひろがっていくなかで、私はぜひともこの「愛吉・すずのぼら」をテーマにした合唱曲を創作したいと願い、合唱曲「ひかりのぼらは」愛吉・すずのぼらによせて」(作曲・木下そんき)を作詞したのでした。詩を書く上で特に書きたかったことは、第一にこの美しいぼらの花が若者の心に平和という命のかがやきを伝えるシンボルになっていること、第二に夫愛吉さんが植えたぼらの花を育てること、すずさんがビキニ事件の苦難の日々のなかで愛吉さんの「原水爆の被害者は私を最

後に」の遺言を守りながら凛々しく生きていくことができたこと、第三に世界のヒバクシャとの連帯で核兵器のない世界をつくらうとの呼びかけをうたいあげることでした。

一九九三年三月一日、ビキニデー集会には、すずさんから「今年には、核兵器廃絶が早いから私が死ぬのが早いから、競争しているような感じがします。……ヒバクシャとその遺族が生き続けているうちに一発残さず核兵器をなくしてくださ」と結ぶ最後の「おことづて」が寄せられました。その年の九月一二日すずさんはとうとう亡くなりましたが、その直前の八月三十一日、病床のすずさんの枕元に合唱曲「ひかりのぼらは」愛吉・すずのぼらによせて」の楽譜をお届けすることができたのがせめてもの慰めでした。合唱曲「ひかりのぼらは」は、翌年の三・一ビキニデー集会で発表され、九月二三日に行われる「故久保山愛吉墓参追悼・焼津のつどい」では毎年演奏されています。

(詩人、静岡県平和委員会理事長)

福竜丸の模型にふれ、船体にふれて

一〇月は修学旅行や社会科見学などで、展示館には毎日子供たちの元気な声が響きます。一〇月四日には八王子盲学校の高校生たち一七人が訪れました。

まず、元乗組員の大石又七さんが製作した第五福竜丸の三〇分の一の模型に触れて船の全体像を掴んだあと、今度は実際の船体、船首のあたりから胴体を横になぞりながら触れて体験しました。



福竜丸の模型で船を体験

「大きな」木がザラザラしている」「スクリーンは冷たいね」などの感嘆の声を上げながらまわりました。

また、二・五メートルのマグロのイラストにもふれて、ペイントの部分になぞりながら「頭が大きい」との声をあげていました。

「平和の宣言」久保山さんの碑に誓い

和歌山県の紀伊中学校の三年生二四〇名は福竜丸展示館を訪問する事前学習のなかでクラスごとに折鶴を折り平和の言葉をそれぞれペナントにつけつりあげました。

一〇月四日朝、展示館に来館、久保山さんの碑に折り鶴をささげ、「平和の宣言」(一部略)を読み上げました。ここにその宣言を紹介します。

「平和への願い」

沈めてよいか第五福竜丸、それは私たち日本人にとって忘れることのできない船。決して忘れてはならない船。決して忘れてはならない証。知らない人には、そっと思い起こさせよう。太平洋ビキニ環礁、そこで何が起こったかを

第五福竜丸展示館が出来るきっかけとなった青年の投書です。

夏休み前に、私たちは、学校の授業で広島や長崎に投下された原爆の、目を伏せたくないような悲惨な被害状況や第五福竜丸について学びました。ただ福竜丸の映画が語る意味を深く理解することは出来ませんでした。けれども、今回の修学旅行で展示館を訪れることになり、数多くの展示物を一つ一つ自分たちの目で確かめ、乗組員やその家族の長い苦しみ、深い悲しみ、非常に強い平和への願いを、私たちの心にしっかりと受け止めたいと思います。

ビキニ事件がおきて五〇年近くになります。これまで多くの人たちがさまざまな形で核兵器廃絶運動を続けていますが今も地球上には、核兵器を保有する国がたくさんあります。核実験が繰り返されています。その核兵器は人類を全滅させてしまうことが可能だといわれています。

豊かさや便利さのために科学が発達してきた人類ですが、技術が発達するなかで自然が破壊され、かけがえのない命も破壊されようとしています。優れた技術を



連日訪れる生徒たち

人間がどう扱うかがまさに今問われているのではないのでしょうか。私たちは「核兵器や戦争やテロがこの世からなくなりませうように」と祈りながら、千羽鶴を折りました。

唯一の被爆国で生まれた私たちは、広島、長崎や第五福竜丸の事件の悲惨さを正しく理解して世界中の人びとに語りついで、核兵器や戦争のない平和な世の中にしていくことをここに宣言します。